

暁斎伊蘇普絵の詞の出典

松村 恒

河鍋暁斎にはイソップ寓話を題材とした絵が数枚ある。イソップのひねった表現で教訓を与える手法は、暁斎の戯画の精神に合致したのであろう。この絵にはイソップの教訓物語を文字で教える簡潔な詞が付せられている。この詞はどこから取ってきたのか興味あるところであった。吉田漱氏はこの詞の翻刻を与えて我々に明治期のイソップ受容の貴重な資料を提供してくれたが、その出典については「錦絵中の戯文の執筆が誰かは明らかではない」として、直接の材源を突き止めることには成功しなかった。代わりに岩波文庫『イソップ寓話集』中の対応するものを指摘し、併記された。それはそれで立派な仕事になったが、岩波文庫のイソップの原典はアウグスターナ系のもので、暁斎のものとは相当に隔たっているものである。材源探しであれば、もっと近いものを検索すべきであった。

その解答を求めることはそれ程困難ではない。というのは、暁斎は明治初期に編纂されたイソップ寓話集の挿絵を描いていたからである。それは渡部温による『通俗伊蘇普物語』^①の挿絵である。これはトマス・ジェイムズの英語ヴァージョンを直接の藍本としている。この渡部本と暁斎絵の詞を比較すれば、著しい近似に気付く筈である。暁斎は自分を含めた数人の絵師が挿絵を描いた渡部のイソップの文を借用したのであった。

渡部の『通俗伊蘇普物語』は翻刻も巻三までしかなく、原本の閲覧もいたって容易というわけでもないで、以下に対応する物語の翻刻を呈示する。また暁斎絵の詞との近似を示すためにも、後者の翻刻をも対照させるかたちで与えておいた。

註

(1) 吉田漱「錦絵「伊蘇普物語之内」」「暁斎」三八(二九八九・四)三一〇。暁斎絵では「伊蘇普」に「いそほ」とルビをふる。これは従来よく知られていた仮名草子の「伊曾保」という表記の読みを敢えて踏襲したものである。渡部訳では「伊蘇普」の表記に「いそつぷ」のルビが見られる。当時なお

仮名草子の「いそば」という発音が相当に膾炙していたために、暁斎は渡部訳の「伊蘇普」という表記を用いながらも、ルビは敢えて「いそば」としたものと想像される。

(2) 渡部訳並びに明治期のイソップ系寓話導入についての書誌的事項は、松村「イソップ寓話研究序説」(『Miscellanea Bibliographica VI』『神戸親和女子大学研究論叢』三一(一九九八)二二三―二四九。そこに洩れたもの、それ以後のものとして、次のものを追加。スコット・ジョンソン「ヴィクトリア朝の『イソップ物語』と明治時代の『通俗伊蘇普物語』」二階堂均訳・山口静一補訂『暁斎』一五(一九八三・七)三―四〇、片桐芳雄「渡部温の『通俗伊蘇普物語』について」『暁斎』三九(一九八九・一〇)一〇―一五、同「渡部温の生涯」『暁斎』四〇(一九九〇・一)三一六、西村賀子「イソップ寓話と日本」『比較文化研究』一八(一九九九)四三―八〇。なおその後入手した阿部弘國『漢譯伊蘇普譚』(明治九年)については、別稿を期したい。インターネットサイトについては、『プリンス通信』二六九号(二〇〇〇・二)五〇五節を参照。

凡例

- 一 左は暁斎絵の詞と、その出典と思われる渡部温訳『通俗伊蘇普物語』の対応箇所を対照させたものである。
- 二 上段が暁斎絵詞の、下段が渡部訳の文の翻刻である。
- 三 スラッシュは行末を示す。
- 四 通し番号は吉田氏のそれを踏襲する。
- 五 暁斎絵詞の本文の後に一行空きで添えられたものは、絵に登場する者の吹き出しに相当する発話である。発話の順序は顧慮せずに、右から左へ、上から下への位置の順により並べた。
- 六 渡部本巻一第八には、「鳶」に対して「羔」の異読を持つものがある様であるが、諸版本の調査は他日を期したい。

1 伊蘇普物語之内 盲人と狼の児の話

あるめくらがおのが手のひらの／上にのせられたいきものを／あてるのをじまんしてゐけるが／ある日かりふどの内へゆきたる時／おほかみの子を手の上へのせ／られたりさうするとめく

巻四 十一オウ

第四百四十八 盲人と狼児の話(61)

或盲人が自分の掌の上に載られた活物を當るのを自慢して／ゐけるが。或時人が其掌の上へ狼の児を載たり。さうすると／(十ウ)盲人がなでつさりつ胡乱な顔色をして。「我は汝の父は／

らが／なでつきすりつかんがへてうろんな／かほつきをして「おれハてまへの／おやぢハいぬだかおほかみだか／しらぬしかしてまへをひつじの／るゐだとハおもやアしないぞ
わるいせいしつハはやくから／しれますどうして人が／おほかみをひつじだと／思ふものか

「エ、とんでもこれハ／ねこでなしぬところでなし／ぶたの子でもなしひつじの子だ／とも思ハれねへ

「あて市／さんけふハ／いつものやうに／うまくあた／らない子

「おぢさん／あたまを／いじる／と

「ハ、アまだ／／そんな／ことでハなか／／あた／らぬ

2

伊蘇普物語之内 羊と狼の話

あるとき羊がや柵の上から／下を通るおほかみを見おろして／しきりにあくこうなしければ／おほかみ立どまりにらみ／あげて「ナニこのひけふものめ／おれを馬鹿にするな／なにもうぬがつよいの／じやア子へぞゐどころが／い、からの事だ

高位に居て下の／人をあなどるは／あたかも羊が狼を／の、

犬だか狼だか知らぬ。雖然汝を羊の属だとハ思やアしないゾ。／
悪生質ハ早くより知る、ものじやゾ

卷之一 五ウー六オ

第八 鳶と狼の話(12)

(六オ) 鳶。屋の上より下を通る狼を見下し。頻りに悪口すると。狼立止り／睨あげて。「ナニ。此卑怯ものめ。乃公を馬鹿にするな。何も汝が強い／のじやア柵へぞ。居處がい、からの事だ
高位に居て下の人をあなどるは。恰も鳶の狼を罵るに異らず(補)

しるにことならぬぞ

「ぶんめいかいくわの／この東京にこしに／りようとうをよこたえて／さいみのはおり／はさみ手ぬぐひ／ナントひらけ子へやつ／じやナア

「ナニを／こしやくな／この唐人め／下におりて見ろ／手ハ見せぬぞ

3 伊蘇普物語之内 獅子の戀慕の話

むかし或る山にすみけるし、きこりの娘に／れんぼしてむこになりたいたいひこみければ／おやぢはなはだめいわくして一ツのはかりごとを／思ひつき或日し、のところにいたり此度／御申こみの談ハまことにもつてめうがしごく／ありがたく存奉りますしかし大王の／御はや御つめのやうでハむすめが／おそれ奉りますゆゑどうぞ其／おはやおつめをおとらせくださる様に／致ししからバむすめもさぞほれ／奉らんと云バし、がそくぎに承知／してつめをとらせはをぬかせそこで／むこになりたいといつて娘のかたへ／出かけて来ければモウ身にそなへの／ないものハチツトもこわい事ハないと／おやぢがきうにつよくなりてんびん／ぼうをおつ取ておしかけむこをた、き／出せしとぞ

卷一 二十九オ―三十一オ

第四十二 獅子の戀慕の話(56)

(三十ウ)むかし或山に住ける獅子。樵夫の娘に愛戀して。爺に迫り娘を娶らんと／乞へり。爺是を嫌へども。もし大王の機嫌を損ぜば。如何なる災害にか、／らんもはかりがたしと。とつおひつ猶豫せしが。きつと一計を案出し。／直に獅子の許へ至り。「此度御申込の趣は。誠に以て冥加至極。難有存／奉ります。しかし大王の御齒や御爪の様では。何處の處女もおそれ／奉らぬものは御坐るまい。仰ぎ希くは御齒を抜き御爪を剪り。／ちと男振をつくらせ給へ。然らば娘もさぞ惚奉り。我婿殿にも相應く／候はんと。恐る／くのべければ。獅子王即坐に領承し。(どんな男でも情人には／御坐ります)／齒を拔せ爪を剪せ。そこでいよく婿になりたいた。娘の方へ出かけて来ると。／(三十一オ)既身に備の無も

すでにめ爪牙つめきばをうしなつたのちハ／いかにともすることができぬぞ

「コリヤかたいつめじや二三本／きつたらモウのこぎりの／めがつぶれたはやく／めたてやぐれば／いゝが

しゝ／「つめをきられるのも／はをぬかれるのもよいが／しりのまハリの毛を／さうぬかれてハ／ちうぐらいだしかし／おむすのかわいゝにハ／かへられぬペロ／／／／／

娘／「アレサちつとの／うちだからがまん／しておいでよ／そんな処へ／手をやつちやア／いやだヨ引

4 伊蘇普物語之内 畜犬と狼の話

ある雪あがりの月夜にうゑたる／狼がこゑたるかひ犬とであつて／「おまへハだいぶふとつておいでなさるな／くひものがよいとみえます私ハちうや／くひものゝせんさくにほねをおつてかく／やせおとろへております」といふと／「犬がベラボウなそんなにくるしむ／事があるものかおれのだんなに奉公／しなせへそうすれバうまいものをくつて／あたゝかにくらせるから」といふゆゑ狼が／うれしく思つてそのあとについてゆく／うち

のは。少も可憐事はないと。爺急おやぢに強くなり。天秤／棒てんびんぼうをおつとつて。押かけ婿おしむこをたゝき出せしとぞ
既に爪牙つめきばを失つたる後は又如何すべき（補）

卷之四 五ウー八ウ

第四百十二 家犬と狼の話 (34)

ある雪後の月夜に。瘦て飢たる狼がよく肥たる飼犬と邂逅／たり。先ヅ一通りの辞礼が畢すむと。狼が「足下。足下ハ甚肥て／（六オ）お見えなさる。如何なされました。汝の食物ハ甚御性に会ふと見／えますナ。僕ハ斯く昼夜食物をさがして徘徊あるきしますが。ヤツトハヤ／活いきて居ると申計りで御坐ります」と云て歎息をするゆゑ。／犬が得意な顔色になつて。「もし足下は我の様になり／た
いなら。我のする様にすれバ好ノサ。」狼「ハテ眞實で御坐り／

ふと犬のくびわを見つけそれは／なんじやとたづねれば犬がこれハはしらへつながる、／時のくびわじやとこたへると狼がきもをつぶ／して「わしハくびたまへくさりで王様のやうな／ごちそうにならうよりボロ／したばんのかわ／でもきらくにくつてゐる方がよいと云てあとをも／見ずににげさりけるとぞまづいものをくつても天性自由の権を／うしなハぬ方がましじや

「ナンドかめ公／おめへハ／くびわを／つけられて／ゐるのかおれハ／そんなことハ／まつびら／ごめんだ

「ナニこのくびわが／いやだそれじやア／うまい／ものハ／くへ子へぜ

ますか。夫ハ如何すればよいので御坐ります。」犬「ナゼ。旦那の家の／番をして盗賊の忍入ない様にするノサ。虚も詐もない氣の毒／だと思ふから信実の事を話します。こんな雪霜や風雨に／野暴の暮は乃公には辛苦で出来ない。ナント頭の上には／（六ウ）暖かき屋蓋があるし。手許にハ絶えず腹充満の美味があると／いふ暮は。我が思ふに少しも悪い交易ものでハ御坐るまい。實に／夫だから我の踵へ次てさへ来ればいいのだ」といふと。狼ハうれしく／思つて相伴歩行てゐる内。ふと犬の頸につけてあるものを瞥然／と見出して。何だかめつらしくツて堪りかね。夫ハなんで御坐ります」と／問かけると犬「エ、呆生ナ。なんにも有リアしない。狼「ナアニ。ダガ。どう／ぞ何度御坐ります。犬「オ、。此つまら子へ物かへ。多分鎖の付く／此頸環の事だらう。狼胆をつぶして「エ。鎖。汝前時。何時でも／何處へでも勝手に往くなど、いふ事ハ出来ないとは説示ら／（七オ）なかつたぜ。」犬「ナゼ。さうでもない。汝は我をいつそ酷いめに／でも逢てゐる様に思ふノダガ。随分時にとつてハ昼間の内は／鎖で羈れてゐる事があるが。雖然夜になると請合じや。／夫リア屹度休暇が出て。旦那様の御膳から少許離れた／處で美食を下サル。まだ／美しい侍女などが我に澤山／食餘りを与ます。我ハケ様な寵大じやぞ。なんでも寄るときは／ると衆人に「なんだカメヤ。西洋人犬を呼ぶに來々といふ洞なり邦人謬傳／何が欲しい。カメヤ。何處へゆくのだ」と云れてゐるのじやと誇／説をして聞かせると。狼が「オヤ。夫ハ汝には造化な夜だ子。／（八ウ）雖然我

伊蘇普物語之内 開帳仏の話

或やせ馬が／開帳仏をのせて／ぎようれつで／町をねりあるくと途中の／人がみなひざまづいて手を／あわせておがみたふとむゆゑ／馬がきうにすましたかほ／つきになりはなうごめかして／おふまたにあるきゆくにぞ／まごがむちをふりあげて／このちくしようにめうぬが／りきむところじやアねへ佛様が／たつといのだ

世の中の愚なやつは／やくめのおかげでうやま／はれるのをおのが／たつといゆゑじやと／思つてはゞをきかせる／馬ならひとなぐりと／いふところ／じや

「きめうてうらい／あんらくじの／おかい／ちやう／く

「なんめう／ほうれん／だぶつ／六こん／しようぐ／りんごん
こん／なんでもおれの／しうしハ／しんとうぶつ／うちまざり
だ

ハ首頸へ鎖で王様の美食にありつかふより。ボロくした／麵の皮でも自由で喰てゐる方が好。

甘いものを喰て首頸に鎖を付られて居るより。寧寒貧／で。天性自由の権をうしなはぬ方がまし／じや。(補)

卷之三 十八オ―十九ウ

第百八 佛像を負た驢馬の話(156)

或驢馬。開帳の佛像を負て。行列にて街頭を緩歩くと。途中の諸人が／皆拜跪て合掌尊敬せり。驢馬是を見て急にすました顔色になり。／鼻うごめかして大踏歩にあるきゆくと。圉夫鞭をあげて「この／(十九ウ)鈍畜生め汝がりきむ處じやアねへゾ。佛様が尊のじや

世の中の愚な奴は。役目の御蔭で敬はれるのを。己が貴ゆゑ／じやと思て威を使う。驢馬なら一なぐりといふ處じや

「ヤレもつたいない／そんな事をいわつ／しやるななむ／あみだぶつ／」

ドウちくしよう／豆ばかりくらひこんで／なんぞといふとはねやがるな

「ヲット／おさいせんが／たいそう／あがるハ／馬にへを／たれられて／ふまれても／ぜにもふ／けの／ことなら／いとやア／しねへ

6
伊蘇普物語之内 野猪と狐の話

或日ゐのし、がきばを石へこすり／つけてしきりにといでゐたる処へ／狐がてうどとほりかゝりてなにを／するのかとふしんにおもつて「ゐの／さんおめへハなにを／しなさるれうしも／こず犬も見えずトントあぶな／げのないのに」といふとゐのし、が／ふりむいて「ソウサだがさうどうが／はじまつてからわしやアきバを／とぐよりほかに用がいろ／＼ありますけんをぬけイ」といふごう／れいがかゝつてからけんを／とぎだしてハおそまきだ

「今／いそほ／もの／がたり／にハ／松の／木でといで／ゐる／

卷之三 三十オー三十一ウ

第二百二十四 野猪と狐の話 (179)

(三十一ウ) 野猪が松の幹へ牙を摩擦して磨でゐる時。狐傍を通りかゝりしが聲を掛けて／狐「ハテ。足下は何をしなさる。獵師も来ず犬も見えず。とんと危殆のない／のに」といへば猪ふりかへつて。「左様サ。雖然騒動が始てからは。私ア牙を磨／＼より他に用が種々ありますけん「抜イ」といふ喇叭が鳴てから。剣を磨ぎ初ては遅緩じや

「かんじんのおやくしよが／こんなでハ天下ハ／くらやみだわし
ア／かなしくて／なりま／せぬ

「いまにかたきを／とつてくださるだらう／おなき／なさるなく

8

伊蘇普物語之内 一双壺の話

或川にふたつのつぼながれ下る／其一ツハやきものにしてその
一ツハ／からかねなりからかねあとより／声をかけて「オイお
すゑさんちつと／おまちななるたけそばへおよりよ／わたしが
つれてつてあげるから」といふとやきものつぼがこまり／きつ
て「それハありがたうしかし／それがわたしにハ一ばんのきん
もつで／ござりますあなたがとほざ／かつてゐてさへ下されバ
わたしは／ぶなんで下りますがもしあなたが／ちかくよつてご
つきりとでも／おやんなさるとわたしハぢきに／まいつてしま
います

あまりつよいものゝそばにハをらぬが／よいなにかもめがて
ぎるといつでも／よわいほうがまけだ

「アレかめさんまつぴら／ごめんだよ大きな／おせわうちやつて／
おいて／おくれ

卷之二十一 オウウ

第七十五 一双の壺の話(106)

或河に一双の壺流れ下る。其一ツは陶にして其一ツは唐銅なり。／
唐銅後より聲をかけ。「オイ陶さん一寸御待な。同伴に参りませ
う。成丈ケ側へ御寄りなさい。私が保護て上るから。」といへ
ば。すえ「夫は難有。／しかしそれが私には一番の禁物で御坐り
ます。汝が遠ざかつて／居てさへ下されば。私は無難で下りま
すが。もし汝が近くよつて。／錚然とでもおやんなさると。私は
直に破滅て仕舞ます

(二十一ウ)余り強いものゝ近辺には居らぬがよい。何かもめ
が出来ると／いつでも弱方が負だ

「オイおすゑさん／こつちへおよりな／いつしよにいこうと／いふのにやぼな／事をいゝな／さんなよ

謝辞

一九九六年にことわざ国際フォーラムが開催された折、参加者有志と共に河鍋曉斎記念美術館を訪問する機会を得た。その際、曉斎の伊蘇普絵について、同館館長河鍋楠美さん、同館学芸員加美山史子さんに色々とお教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

なお、その直後に翻刻の対照テキストは作ったのであるが、当時ルビ付き縦書き段組みのレイアウトで印刷するのに技術的な困難があつて、そのまま篋底に置かれたままになつてしまった。今ここに新設比較文化字部の機関誌に掲載される機会を得たことを有難く思う。

本誌口絵として掲載の写真は1（口絵3）と5（口絵4）である。掲載を御快諾下さったそれぞれの原画所蔵者である河鍋曉斎記念美術館と福富太郎さんに感謝申し上げる。その他の六枚の絵のカラー写真は、河鍋曉斎記念美術館・東京都江戸東京博物館『河鍋曉斎』（蔵：河鍋曉斎記念美術館、一九九四）八二―八三頁に見ることができる。また翻刻にあたり種々御教示下された花田富二夫先生への謝意も逸することはできない。